

平成18年度版
『現代の国語』『現代の書写』
教科書特集号I

ことばの 学び

三省堂 国語教育
a new way
of learning
Japanese

ワンテーマ誌上交信 「からだのことば」
夏井いつき 平田オリザ

特集

今、問われる
「読むこと」の学習指導

vol.

8

教科書新ルネサンス宣言

① 教科書からひろがる学び

②

対話する
教科書

③

新しい学びの
サイクル

④

テキストから
プログラムへ

三省堂『現代の国語』『現代の書写』は、教科書というものは豊かで楽しいことばの学びの入り口であると考えます。
その奥に無限にひろがるひとりひとりの学びの世界
…そんな国語教科書をめざします。

平成18年度版
『現代の書写』



平成18年度版
『現代の国語』



平成18年度版
『現代の国語』
『現代の書写』
教科書特集号
I

ことばの 学び

三省堂 国語教育
a new way
of learning
Japanese

8

vol. 8
CONTENTS

+表紙イラスト
藤川亜矢
+デザイン
石川愛子
+DTP制作
田頭ひろみ

●ワンテーマ誌上交信

「からだとことば」 夏井いつき 平田オリザ …… 2

●特集

今、問われる 「読むこと」の学習指導

「読むこと」の復権 三浦 和尚 ……	4
リーディング・リテラシーと読解力との空隙 くうげき 中村 敦雄 ……	6
ときには詳細な「読解」も 木下 ひさし ……	8
説明的な文章による多様な学び 飯田 和明 ……	9
子どもの読書力をつける 足立 幸子 ……	10
「解釈」と「論理」をめぐる 町田 守弘 ……	11
平成18年度版『現代の国語』 「読むこと」学習材の系列 ……	12
「読解・読書」への理解を深めるために ……	14

●教室で読む 1

文学的文章の学習材への多様なかわり
松友 一雄 …… 16

●ちょっと気になるカタカナ語 1

「マネジメント」「リテラシー」
「ワークショップ」「パフォーマンス」 …… 20

●平成18年度版『現代の国語』『現代の書写』SNP

構成マップ …… 22

●学びを開く 一北から南から 1

一周遅れのトップランナー
矢内 忠 …… 24

●読み語りの出前 1

「あたたかい時間を思い出した」中学生
後路 好章 …… 25

からだとことば

これから4回にわたって、平成18年度版の新しい教科書の特集します。
巻頭は、一つのテーマを各界でご活躍中のお二人に
語っていただく「誌上交信」です。

人のこころを魅了することは、 自分の五感から生まれる

数年前、NHK教育テレビの子ども番組「天才てれびくんワイド」で俳句コーナーを担当したおり、「たんぽぽ」という季題で作品を募集したことがある。短い募集期間にもかかわらず三千通余りが届き、担当ディレクターともども驚きつつ喜びつつ選句にとりかかったわたしだったが、そのわたしを仰天させた一句が、これだった。

たんぽぽが綿毛になって旅をする

応募三千通のうち、なんと三百通余りが一言一句変わらないこの俳句！次から次へ同じ句が出てくる苦行のような選句作業を終え、わたしは暗澹たる心地だった。こんな固定観念を子どもたちに植え付けているのは、いったいだれなのか、なんなのか。

たんぽぽだけではない。「かたつむり葉っぱのかけでおひるねだ」「ひまわりはおひさまをみて笑ってる」この手のお決まり俳句は、全国どの学校の掲示板でもいまだにお目にかかるシロモノだ。

「句会ライブ」と名づけた授業を引っさげ、全国の小・中・高校を歩き回

るようになって、十年の月日が過ぎた。「だれでも五分で一句つくれる技を教え、みんなで作くりみんなで議論しみんなを選ぶ」というスタイルの授業を二時間経験した子どもたちは、ことばに対する認識・作者に対する認識をたちどころに塗り替える。

脳みその操作でつくった俳句は、同類の固定観念が核となる。似たような句をつくっていたのでは、グランプリなんて永遠にとれるはずがないことに気づいた子どもたちは、新しいことばを探し始める。人のこころを魅了することばは、脳みそからではなく、自分の五感から生まれることに気づいた子どもたちは、自分の体と会話するようになる。そこから生まれることばはいきいきとした鮮度をもって、わたしたち読みに手に迫ってくる。

そんな子どもたちを増やすことが、ささやかな教員経験をもつ俳人としての、ささやかなライフワークだと腹をくくり、今日もわたしは子どもたちのもとへと足を運ぶ。



夏井いつき

【なついつき】俳人。俳句集団「いつき組」の組長として、全国で「句会ライブ」を展開。第八回「俳壇賞」をはじめ各賞を受賞。著書に、句集『伊月集』（本阿弥書店）など。



平田オリザ

〔ひらた おりざ〕 劇作家・演出家・桜美林大学助教授。
95年『東京ノート』で岸田戯曲賞受賞。02年『その河をこえて、五月』で、朝日舞台芸術賞グランプリ受賞。

ここ数年、表現教育の端っこにかかわってきて思うのは、誤解を恐れずにいうなら、「表現教育なんていらない！」ということですね。全国でモデル授業を行っていて、いちばん楽しく、成果も上がるのは、小さな分校などの複式学級のクラスです。なぜなら、ここでは学年を越えた交流が日常的に保障されているから。そのような授業を体験すると、やはり表現教育は、技術や知識を教えるものではなく、子どもたちの中にある表現の芽を開かせることなのだと感じます。

他者に向かって表現する力、他者の表現を受け止める力を、遊びや生活の中から、子どもたちは自然と身につけていきます。だから、表現教育なんていらなくて、子ども同士が遊ぶ時間を大切にしてあげればいい。とまあ、ここまでが理想論です。でも実際には、今の子どもたちは、ゲームやコンピュータやテレビとばかり向き合っていて、子ども同士で身体をぶつ

け合う遊びのやり方を、よく知らない。学年を越えて他者と触れ合う、かつての原っぱのような空間も保障されていない。だから、わたしの仕事は、「世の中には、『劇』という遊びがあるんだよ」ということを、子どもたちに伝えることだけだと思っています。

人間が、本当に表現を必要とするのは、例えば愛する者を失って、その哀しみをなにか形にしなければ、どうにもいたたまれなくなってしまうようなときです。学校で教えられる表現教育は、そのときのための準備にすぎません。受験の面接をうまくやり過ぎるらしいの「表現力」なら、簡単に教えてあげられるのかもしれませんが、本当に身体に根ざした表現は、一朝一夕に身につくものではありません。

だからわたしの授業では、表現がうまくなくてほしいとは思わない。それよりも、授業を受けた翌日から、子どもたちの会話が、少しぎこちなくなるくらいがちょうどいいと思っています。子どもが、ままならない自分の身体や心や言葉に気がついたとき、それが表現の出発点になるのだと思います。

世の中には、
「劇」という遊びがあるんだよ

今、問われる 「読むこと」の 学習指導

PISAの結果に基づく問題提起など、「読むこと」の学習指導が再び問われています。ことばがところに響くこと、ところがいのちの尊さに届くことを中心にすえた国語の授業づくり。平成18年度版『現代の国語』は、こうしたことを大切にして、多くの方々と「読むこと」の学習指導について考えてきました。

「読むこと」の 復権

三浦和尚

愛媛大学

戦後の国語科教育は、そのときどきの学習指導要領や教育施策によって、良くも悪くも力点のおかれ方が変わり、ときにそれは「流行」のように見えることさえあった。

そういう移り変わりには、例えば「話すこと」がやつとまともに教育現場で取り上げられたといった、「歴史的意味合い」があることは事実である。「流行」のように見えながら、しかしこれまでやってこなかった、その「やってこなかったところ」に目を向ける意味は、十分にあったように思われる。ただ、ここ数十年の流れでいえば、強調された「書く」や「話す」が、その「手段や形式」のところまで議論され、その「内容やことば」がおろそかにされてはいなかったか。

例えば「ディベート」は、それ自体に、情報の収集・整理、話し合いの形の理解、根拠を明確にする、論理的に話すなど、一定の教育的効果や意味があることは認めるが、それらはある意味で手段、形式、技能というレベルのものではないだろうか。私たちが目の前の子どもたちに身につけてほ

しい力は、究極的には、「自分は本当は賛成なのに反対だと言ひ張る力」ではなく、「自分が信ずるところをわかつてほしいと深切に訴える力」や「自分の意見をきちんともちつつ、柔軟に修正していく力」だと思われる。そういう点を「ディベート」は必ずしも充足するものではない。

同じようなことは、「書く」についてもいえるだろう。以前も今も、書くことについての教師の問題意識は、形式というよりも、何を書くかという「中身」ではないか。あるいは、書くことにまつわる思いや考えの深まりの問題ではないか。

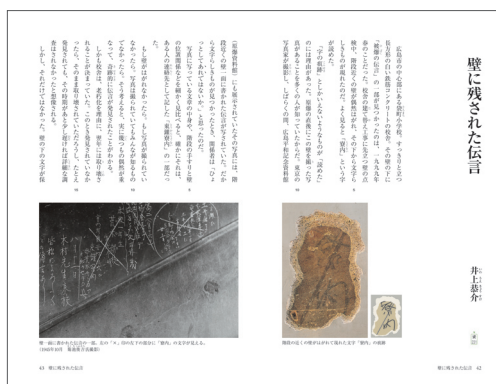
心ある教師たちが見て取った子どもの状況や、子どもへの願いとは微妙にずれるところで「流行」が推移したように思われてならない。それは繰り返せば、学習の力点が「手段や形式」なのか「内容やことば」なのかという問題である。

おりしも、OECDの学習到達度調査結果が発表された。朝日新聞(二〇〇四年十二月八日)一面の見出しは「日本の学力

落ち込む」であり、「読解力」が、二〇〇〇年の世界八位から二〇〇三年は十四位まで下がったということが、大きく取り上げられた。

「読解力」の設問は未公表であるから、どのような力がどのように落ちたのかという分析は今では難しい。ただ、前回の問題例として「国際援助機関の統計表を示し、エチオピアでの活動がきわめて低調な理由を推測させる」などが報道されているところから推測すると、試験問題などで一般に想定する読解力とは違って、むしろ「理解力・思考力」、あえて加えれば「表現力」に近い能力が総合的に測られているのではないかと思われる。

それによって楽観的になれるのか、むしろ



2年「壁に残された伝言」

被爆直後に書かれた伝言が、50年以上を経て消えることなく奇跡的に発見された経緯をたどることで、ことばのもつ力やその意味について考えることができる。また、普通の願いである平和への思いも深められる。

ろそういう能力が落ちていくことのほうが問題だと受け止めなければならぬのか。いずれにしても、子どもたちのことばの力を見直すよいきっかけとしなければならぬのだろう。

考えてみれば、読む力の育成は、国語教育の中心的な課題である。きちんと読むことは、現在の文化水準への到達を可能にすることであり、現在の文化をさらに発展させる前提である。シンプルに例えれば、論文が読めない人に論文はつくれない。読むことの重要性は、昔も今も変わってはいはずである。

そのように状況をとらえたとき、わたしたちはこれからの「読むこと」の学習にどのように向かえばよいのであろうか。

いうまでもなく、一つは、読むことのおもしろさを伝えることである。知らないことがわかる喜び、文学世界に浸る喜び、物事を深く、きちんと考えている人がいるという発見、ことばがこれほどの力をもつのだという自覚、そういったものを、洗練された学習材から受け止める体験を保障したい。その意味では、例えば『現代の国語』二年生の新学習材「壁に残された伝言」は、説明的文章としての骨格をきちんともちながら、人間の大切な営みを伝えている点で、格好の読みものとなっている。

もう一つの視点は、学習材をもとに教室で話し合い、考える体験の保障である。



【みうら かずなお】近著に『話す・聞く』の実践学（『読むこと』の再構築）（いずれも三省堂）など。附属小学校長として子どもたちと楽しく過ごさせてもらっている。「発達」が見えるところから学ぶものは大きい。

教室での話し合いは、従来、読みを深めるための手段、あるいは読むことのおもしろさを体験させるための手段として認識されていたように思われる。しかし、考えてみれば、発問や課題は、読みを深めるための切り込みの視点であり、確かな視点に基づいて文章を解析していく経験の積み重ねが「読む力」になっていくのではないか。また、教室でさまざまな疑問をもとに話し合い、考えを深めていく経験自体が、優れた思考体験であり、その積み重ねが思考力の育成につながることは疑いなくろう。そういう意味では、発問や課題をおろそかにすることはできない。『現代の国語』の「学びの道しるべ」読むことの学習課題は、読みの視点の提示であり、読み手としての意識の流れにそいつつ、深い思考を促すものとなるよう配慮されている。「内容やことば」を深く耕しつつ、「手段や形式」に習熟していくような「読むこと」の学習を追究していきたい。そのことが本当の人間としての力につながっていくのではなからうか。

リーディング・ リテラシー (reading literacy)

と読解力との くうげき 空隙

中村敦雄

群馬大学

1 PISAシヨック から何を学ぶか？

二〇〇四年十二月七日、PISA(OECD)学習到達度調査 二〇〇三の結果が公表された。わが国の十五歳の学習者の「読解力」は前回の八位から十四位へ下降し、平均点も加盟国平均の五〇〇点を割り込む四九八点であることが報じられた。結果の絶対視は危険だが、わたしたちにとって切実感をもって学ぶべき点が多いことは確かである。今回の試験問題は非公開であり、

具体的分析を前提にした議論は後日まで待たねばならない。だが、前回のPISA二〇〇〇から類推すると、次の推論が可能である。

前回・今回ともに日本よりも上位スコアの国を概観すると、メディアの学習を母国語教育に取り入れている事実が指摘できる。そうした国々の多くは一九九〇年代、母国語教育を実生活で求められる言語能力に対応した真正な(authentic)内容へ改良する方向性での教育改革を経ている。その結果、テレビやインターネットのような映像的要素を含めたメディアを学習活動に

2 「読むこと」の 何が課題か？

取り入れる基盤が確立された。こうした改革の方向性を反映させた問題がPISAでは出題され、今回の結果となったのである。

もしもPISAで日本の高校入試問題が出題されたら、どんな結果になっただろう。おそらく日本は上位スコアを確保できたのではないか。ゴールをしほりこみ、そこに特化させた教育を効率よく推進していく中で、日本の教育界の蓄積は少なくない。しかし、わたしたちが知るべきはゴールとしてわが国で要求されてきた読解力と世界的水準との間の空隙が広がってしまった事実である。reading literacyに対応させて「読解力」という訳語が用いられているが、わたしたちが理解している範囲の読解力を前提にしてはならない。

それでは、わたしたちはどのようなことを理解しておけばいいのだろうか

3 「読むこと」の 内包の変化・拡充

PISAの「読解力」は「作業や活動などをを行うために読む力」を重視する機能的

リテラシー (functional literacy) の考え方に立脚している。わが国では伝統的に教養主義的な読書観が根強く、基本的認識において、わたしたち国語教師の「常識」を見直す必要がある。PISAの「読解力」は以下の三側面からなる。

① 情報の取り出し

テキストに書かれている情報を正確に取り出すこと。本文中の記述に忠実に即した理解活動である。

② 解釈

書かれた情報がどのような意味をもつかを理解したり、推論したりすること。

③ 熟考・評価

テキストに書かれていることを知識や考え方、経験と結びつけること。批判的な評価などが含まれるとされる。

わたしたちになじみがあるのは①と②である。③が今後の課題であることは容易に想像がつく。だが、③について、前回のPISA二〇〇〇のスコアは好成績（一位グループ）であった反面、①と②は二位グループという事実と合わせて考える必要がある。ちなみに一部の新聞では、今回も②が不振であったと報じられている。

ただし、管見の限り、③についての出題は、近年わが国でも注目を集めている「批判的（クリティカルな）読み」の一部であ

る、テキスト内情報と外的現実とのかわりが主であって、好成績は日常知での対応結果とも予想される。一方、わたしたちが熱心に取り組んできたと考えやすい②は、実際のところ、「主題」や「要旨」をまとめる大づかみな方向性での解釈に偏りがちであった。細部をとらえたり、重要度を判断したりといった、「批判的読み」の基礎を支える解釈が弱かった。①についても同様である。

こうした視点から、わが国において「批判的読み」を本格的に推進すべき必要性が指摘できる。「読むこと」の中に「批判的読み」を組み込むことによって、③はもちろん、その基礎となる従来型の①②の質的改善にも連動しうると予測される。教室での「批判的読み」を可能にする手立てとしてメディア・リテラシー育成のための諸実践がある。テレビやインターネットなど、実社会でのメディアの特性を理解し、解釈、熟考・評価、吟味・検討する学習を成立させるうえでヒントとなろう。

4 他領域の活動との関連

周知のように、読むことの授業は過度のパターン化がなされている。だが、時間が

足りないといった口実のもと、教育として大事な要素までを削っていないだろうか。「主題」や「要旨」への偏りとともに、もう一つの問題点として学習者の思考力の伸長を促しにくいワークシートへの依存があげられる。というのも、実生活でワークシートは存在しない。与えられた設問のもと、単語で空欄をうめ選択肢にチェックを入れればすむ場面は教室の中だけである。自分の解釈をことばで伝え、他者と相互交流する大事さを再確認したい。すでに前回、文章で解答する問題への無答率の高さが問題視された。「読むこと」の能力は他領域の活動と相補的関係のもと伸長することから、深刻な問題として受け止めたい。真直さを追求している国では、学習者の思考力の芽を摘む害悪として、ワークシートを教室の中で使用しなくなった事例もある。こうした切り口から新たな「読むこと」のあり方を構想していくことが、現在の閉塞状況打破につながるのである。



【なむら あつお】国語科におけるメディア・リテラシー育成について、どのような実践が可能か、実践を支える教育的インフラストラクチャーとして何が必要か、といったテーマについて臨床的観点から研究している。

ときには詳細な「読解」も

国語科は「言語の教育としての立場」を重視しなければならぬわけだが、その「立場」をどうとらえるかによって文学作品を読む授業の扱いは変わってくるようである。だが、立場はどうあれ、現実の教室で子どもたちは文学的な文章を読む。いや、読まされるといったほうが正しいかもしれないが、言語の教育の一環として文学作品を読んでいるのである。

文学作品を読むという学習活動は、現行**学習指導要領**にかかわる**教育課程審議会答申**中の「文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め」という文言により、なにやら悪者のように隅に追いやられてしまった感がある。けれども、教課審のいう、改めなければならぬ「詳

木下ひさし

成蹊小学校



〔きのした ひさし〕 武蔵野東小学校、東京学芸大学附属小金井中学校を経て、現在成蹊小学校教諭。近著に『読み合う教室へー文学の読みの授業ー』（百合出版）など。

細な読解」とはなんなのかが一つの問題として問われなくてはならないのであって、「詳細な読解」そのものは否定されるべき活動ではない。いや、「詳細」かどうかは二次的なことであって、大事なのは文学的な文章を授業の中でどのように読み進めているかどうか、そこに言語の教育としての活動が存在しているかどうかではないのか。だから、ときには「詳細な読解」があってもよいのである。

例えば「トロッコ」。大声でひたすら泣き続ける良平。その良平を読むときには、土工に「帰んな」と言われ無我夢中で帰るとき的情景描写を「詳細に」読まなくてはならないだろう。さらに、その描写はトロッコを押しながら喜びからだんだんと不安になってくる良平とつながっているのだということもおさえなくてはならない。これも一つの詳細な読みではないか。そして、それが重なって成人した「今」の良平の読みになっていく。

菊池寛の「形」。文体そのものが学習者になじみがないので、その点でも丁寧に詳細に読んでいかななくてはならないが、例えば「猩々緋の羽織」と「唐冠とうかんのたかまかぶと」の描写とそれらに対する新兵衛の思いは詳細に読んでいきたいことの一つである。また、最後にある「後悔するような感じ」という表現も「よう



3年「形」

巧みに構成されたこの作品への理解は、新兵衛の「形」ともいえる羽織とかぶとの描写や、それらに対する新兵衛の思いを詳細に読むことで深められる。

3年「形」
巧みに構成されたこの作品への理解は、新兵衛の「形」ともいえる羽織とかぶとの描写や、それらに対する新兵衛の思いを詳細に読むことで深められる。

な」に注目させることで作品あるいはそこに生きる人物への読みは深まるのではないか。
作品として表現されている言語から、情景や人物の心情を想像し、ときには自分の思いをそこに入れ込みつつ一つの「読み」を生み出していく過程もまた言語の学習過程なのである。表面的に伝え合うことだけが言語の機能でないことはいうまでもない。人が人として存在するための言語、その言語の教育のために、ときには「詳細に」読むことだって必要なのである。

説明的な文章に よる多様な学び

「説明的な文章」を素材にして「読むこと」の学習を想定する際、その学習内容としては、次のことがあげられる。

・文章の展開をきちんと追って、筆者の「いたいこと」の中心」を探し、的確に文章の主旨をとらえる。

・筆者によって用いられている観点のとり方、論展開の仕方などを学び、多角的な、筋道立った思考の方法を知る。

・新しい問題意識をもち、それを発展させて、自分としての視点や考えをつくる。

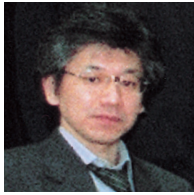
また、これらの学習を支え、広げるために、

・語彙、文体、文の述べ方、文章構成などを学ぶ。

・友達と意見を交流し、学びの輪を広げる。

飯田和明

筑波大学附属中学校



【いida かずあき】筑波大学附属中学校教諭。小砂丘忠義を中心とした生活綴方教育、教育の事実把握の指向と日常の教育実践の上に成り立つ国語教材化論に関心を持っている。

などをあげることができる。

『現代の国語』の「説明的な文章」に関する素材に付された「学びの道しるべ」には、これらの学習内容を実際の力にしていくなめの方途が示されており、具体的な学習展開の助けになる。また、採られた文章との適宜な対応をもって随所に配置、記述がされている「ことば発見」は、言語事項そのものの学習に加え、その角度から、再度読みの学習に立ち返って学習を深める契機を与えてくれるだろう。

発展的な読み、各教室独自の学習を展開する際には、「学びをひろげる」を参考にすることができ。資料編の文章との合わせ



3年「松と杉」

わたしたちに身近な木材について、具体例をあげながら論じた文章。「松」と「杉」、それぞれについてまとめられているため、二つの文章の比べ読み学習も可能である。

読み、比べ読みなどによって、目の前の子どもたちに必要とされる学習の範囲を、さまざまな規模で設定することが可能である。

三年間を通した「説明的な文章」の内容には、自然・科学・言語・社会・福祉・環境・人間・歴史・コミュニケーション・身体・平和・国際・情報・文化・生活といった、多様なテーマが見渡せる。また、写真・グラフ・図・説明等の豊富な補助資料は、学習に広がりや順序性、適宜な限定を与える手だてとなるだろう。

さらに、新しい学び方を示唆する素材も見られる。「松と杉」は、日本における二つの代表的な樹木をあげて併記的な記述を行っている。しかし、その二つの記述から、一つの結論を導くために、最終的にそれらをまとめていくといった構成は取っていない。学習者は、文章の述べ方や論展開のされ方の違いを含めて、筆者の見方を総合的に読み取っていかなければならない。「比較」という学びの中に、新たな視点を与えてくれる素材といえよう。

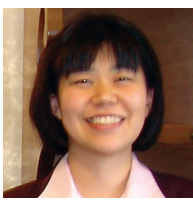
教育の状況とその事実とを把握しつつ、身につけるべきことばの力を具体的に測定し、柔軟な教材化を図ることが肝要と考えている。教科書の内容の特徴を理解し、その適宜な活用を図ることが、確かな読解の力とともに、その適正な運用の力を育てることに繋がると思われる。

子どもの 読書力をつける

現在、国語教室では、読書力をどのようにつけたらよいかという課題を抱えている。経済協力開発機構（OECD）が二〇〇三年に、四十五カ国の十五歳の学習者を対象にして行った学習到達度調査では、二〇〇〇年の調査で八位だった読解力が十四位となった。なかでも無答率が高かった。これは、受動的に書かれた内容を読むだけではなく、読みたいという意思をもち、読むという行動に移し、読んだことを糧にしながらか生きていける積極的な読み手を育てるということが重要であることを示している。

足立幸子

山形大学



【あだち さちこ】山形大学教育学部講師。専門は国語科教育。スペインの「アニマシオン」、アメリカの「リテラチャー・サークル」など、読書指導の方法を中心に研究を進めている。

そもそも、読書とは、複雑な一連の思考過程である。最近の読書研究の中で、優れた積極的な読み手は、読書時に次のことを

行うことが明らかになってきた。

【読書前】 動機づける／先行知識を活性化する／問いをもつ／読む目的と方法を決める／予想する

【読書中】 テキストを試し読みする／テキストの意味を思い浮かべる／読みながら自分の経験とつなげる／予想を確認したり変更したりする／読み続ける

【読書後】 振り返ったり熟考したりする／意味をはっきりさせるために読み直す／自分のことばで語り、問いを発し、議論する／さらに次のものを読む

子どもは、この複雑な過程を何度も経るうちに、より高い読書力をつけていくものである。したがって、読書力を育てるには、読書前・読書中・読書後を想定した細やかな指導が必要であるといえる。

ところが、読書は子どもの個人の好みや生活に依存している。読書力は読書活動によって身につくもので読書の絶対量が必要であるが、最近の限られた国語科の授業時間では扱いきれないのが実情であろう。そうであるならば、子どもが授業に刺激を受けて自ら進んで自由時間に読書したり、個々に自由にしてきた読書が授業中に認められたりするような仕組みを国語科の中に設定する必要がある。

『現代の国語』は、読書力をつけるために必要なこの二点に着目した指導を提案して



1年「小さな図書館へようこそ」
「ことば」「こころ」など、さまざまなテーマの本が、1学年50冊紹介されている。本の表紙、興味がわく紹介文、親しみやすいイラストなどにより、子どもたちの「読みたい」という意欲が喚起される。

いる。すなわち、①積極的な読み手が行う読書の過程に即して、読書前・読書中・読書後の指導をすること、②子ども個人の好みや生活における読書を大切にしながら、その読書を促進していくような方法を授業中にとること、である。『現代の国語』は、本文編と資料編の二部構成になっている。さらに①については、「読書ガイドランス」は読書前の、「ひろがる読書」は読書中の、「ふかまる読書」は読書後の指導を一例として示したものである。これらを参考例として、読書力がつく指導を充実させたい。

「解釈」と「論理」 をめぐって

「解釈」という用語について、『新明解国語辞典（第六版）』では「他の言動や古人の書き残した文章・歴史的事業の意味などを、その人の論理に従って理解すること」と説明されている。ここで注目したいのは、「その人の論理に従って」という点である。同じことばに接しても、それを受け止める側の体験や価値観によって、さまざまな解釈が成立する。適切な解釈をするためには、それを成立させるための「論理」に対する配慮が必要になる。ことばの学びにおける「解釈」について考える際に、まずその前提となる「論理」をどのように育成するかという問題に取り組みなければならない。

『現代の国語』一年生の学習材「ユニバー

町田守弘

早稲田大学



【まちだ もりひろ】興味関心と意欲の喚起がことばの学びの原動力になると考え、楽しく力のつく授業開発についての研究を続けている。著書に『国語科授業構想の展開』（三省堂）など。



3年「メディア・リテラシー」の「学びの道しるべ」
実際に新聞記事の写真や見出しを比較する活動を通して、発信された情報を的確に、クリティカルに解釈する力が養われる。

サルな心を目指して」（三宮麻由子）では、「バリアフリー」のようなカタカナことばの解釈が話題になっている。このことばの本来の意味は、みながバリアから解放されて幸福になれる設備ということであるはずなのに、現実の社会では適切な解釈がなされていないとはいいたい。「バリアフリー」がみなを対象としたものではなく、車いすへの対応のみにとどまっている場合がある。そこに、ことばの解釈にかかわる問題を見ることが出来る。それぞれの論理に従って勝手な解釈をするのではなく、ことばにかかわる状況を的確に把握したうえで、

解釈の前提となる正しい論理を獲得しなければならぬ。

二年生の学習材「壁に残された伝言」（井上恭介）では、広島の小学校で、被爆直後に書かれた伝言が発見されたことが話題になっている。この伝言の解釈とは、単に字句の意味を理解することではない。ことばの背景となった事象を明らかにすることによって、半世紀前の被爆当時がよみがえり、人々は深い感銘を受けた。これもまた解釈ということである。ことばには単なる意味にとどまらない、独自の力がある。解釈によってその力を発見し、生かすことができる。ここでも、状況の理解を解釈の前提となる論理としてとらえることができる。

子どもたちを取り巻くことばの環境には、活字だけではなく、音声や映像などの多様な情報が含まれている。三年生の学習材「メディア・リテラシー」（菅谷明子）では、それらの情報の解釈にかかわる問題点が明らかにされている。メディアから発信された情報の的確な解釈が、今後ますます求められるようになる。メディアからの情報をクリティカルに解釈するための論理を、メディア・リテラシーとしてとらえることができる。

以上のような事例からも明らかのように、解釈の前提となる論理の育成は、ことばの学びの重要な課題である。

平成18年度版
『現代の国語』

「読むこと」

学習材の系列

平成18年度版
現代の国語
現代の書写
教科書特集号
I

今、問われる
「読むこと」の学習指導

『現代の国語』は、教材の採録にあたり、作品の価値を大事にしながら、どのようなことばの力（言語能力）をつけるのか、という観点を重視しています。

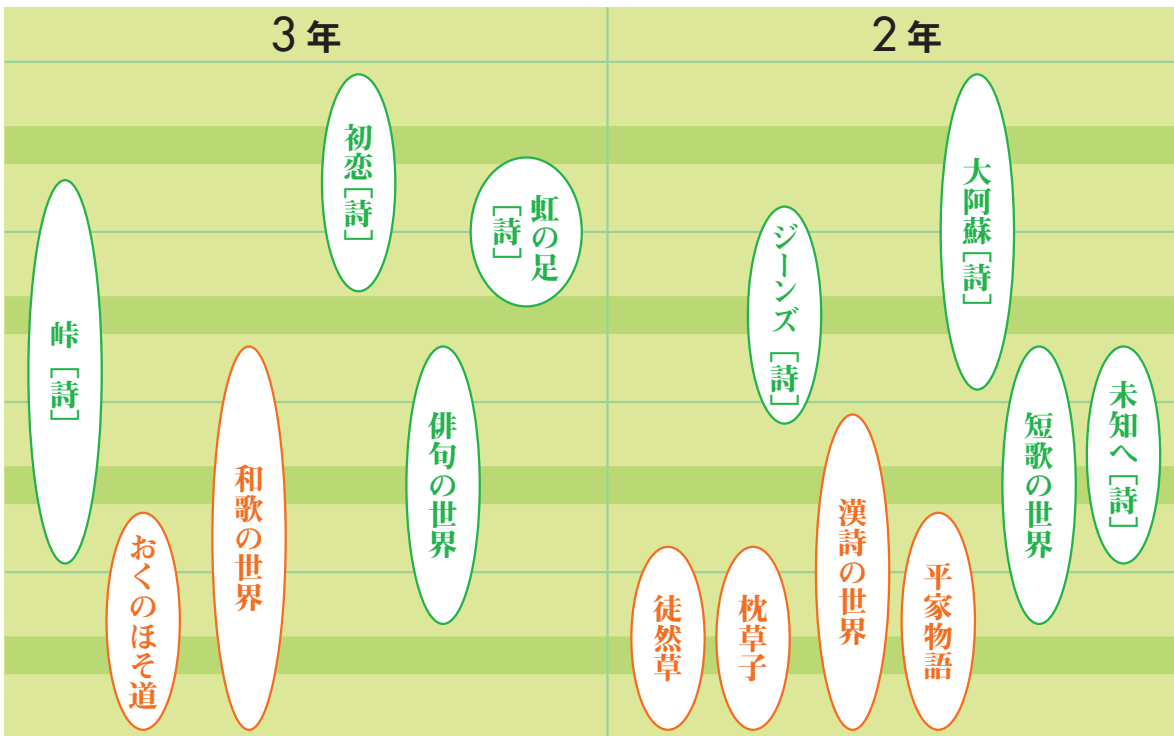
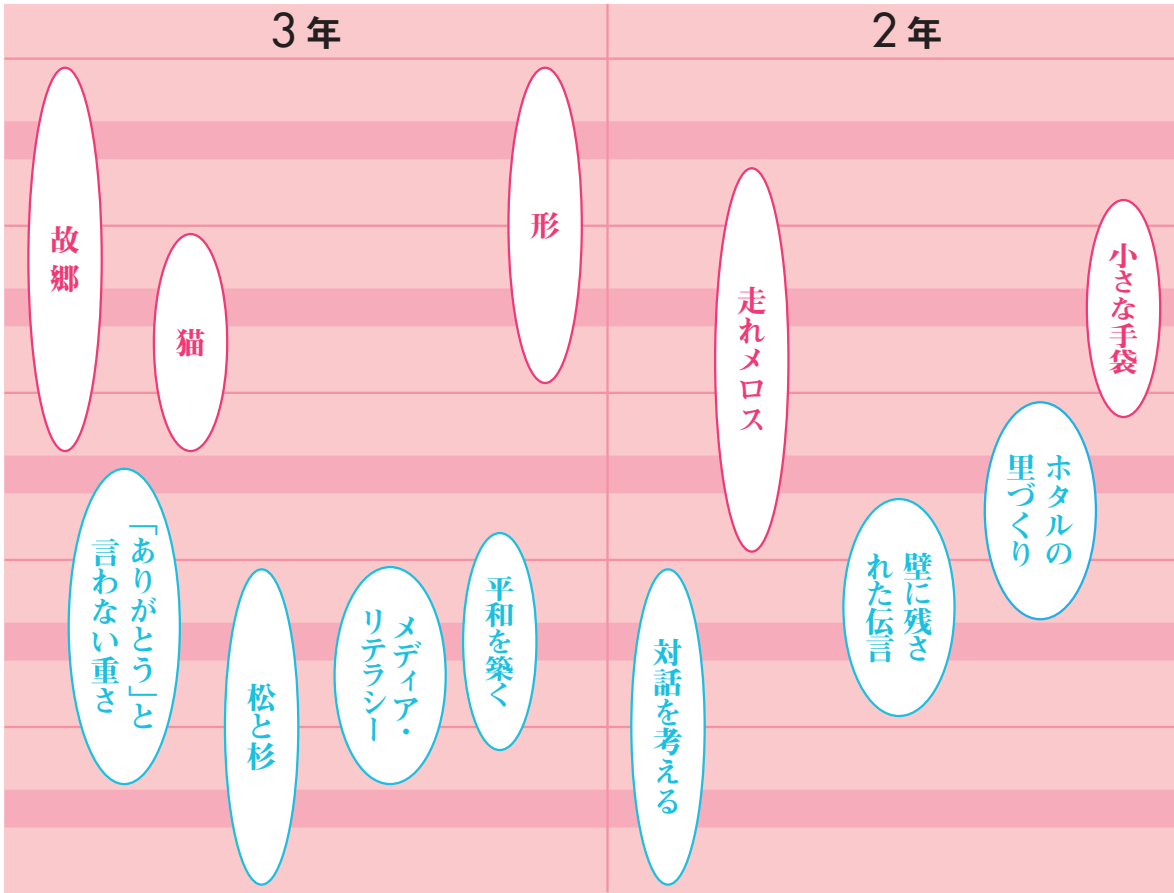
「読むこと」の学びでは、「現代の課題への対応」「自分を見つめ直す視点」「基礎・基本の定着と学びの多様化」という点に特に配慮しました。

【物語・小説・随筆・説明的文章】

【詩歌・古典】

1年		主題	心情・人物像	表現の工夫	構成・論理	要旨
		トロッコ	空中ブランコ 乗りのキキ	アイスクャンデー売り	竜	
				食感のオノマトペ	クジラの 飲み水	
						ユニバーサルな 心を目指して

1年		主題	ことば	韻律	古典鑑賞
		ウソ【詩】		朝のリレー【詩】	
					矛盾
					わたしたち と古典



「読解・読書」への理解を深めるために

参考図書のご紹介



池上嘉彦

『記号論への招待』

(岩波新書 819円 1984年)



M・J・アドラー他

『本を読む本』

(講談社学術文庫 861円 1997年)

解読と解釈、意味の把握の基礎理解のために

Ⓐ Ⓑ

ここが魅力

読むというのはどのような行為か、教材（テキスト）と読むこととはどのような関係にあるのか、記号論の観点からストンと理解できます。

内容紹介

この本を読むことによって、読むことの指導、書くことの指導のとらえ方が広がり、奥行きが出るにちがいありません。確かな読み、完全な読解とはどういうことを意味するのか、読み誤りはどのようにして生じるのか、そういったことの意味を深めることによって、指導の組み立てが構造的なものになるものと思われれます。

全体は

- I ことば再発見
- II 伝えるコミュニケーションと読みとるコミュニケーション
- III 創る意味と創られる意味
- IV 記号論の拡がり

の四つの章によって構成されています。

例えば、読み誤りについて。読み手主体の読みと書き手の意図との間の緊張状態について私たちはさまざまな問いを発するのですが、本書では「コンテキスト」にそった読みということで、明快な解答を与えてくれます。コミュニケーションがいかにして成立するか、伝達の仕組みにもふれられていて、「伝え合うこと」にかかわる指導について、基礎的な理解も得ることができます。

本の読み方に目を開かせる

Ⓑ Ⓒ

ここが魅力

読書の意味から読書技術の実践的な解説まで、一読することによって手にできます。

内容紹介

私たちは、日ごろ漠然と、本を読む技術には段階がありそうだなと考えています。指導にあっても、読みの段階を意識してはいますが、厳密にとらえて指導に位置づけるには、いたっていないのではないのでしょうか。

本書では、この点を明確にし、

第1レベル・初級読書

第2レベル・点検読書

第3レベル・分析読書

第4レベル・シントピカル読書（何冊もの本を関連づけて読む比較読書法）

として、各段階で行われる読書の活動を明らかにしています。

例えば、初級読書においては、①個々のことばを識別すること、②一つ一つの文の意味の理解に力を注ぐべき、と述べられます。点検読書では、①組織的な拾い読み、②表面読み、③積極的読書、にふれ、これが分析読書へと結びつきます。

こうした、レベルを意識した記述は、段階を意識した読解・読書指導の計画に貴重な示唆を与え、指導の展開、指導の創意工夫に関して手がかりを与えてくれます。

- (A) = 基礎的な理論を学びたいときに
 (B) = 広く関連情報を得たいときに
 (C) = 指導改善のヒントがほしいときに
 * 定価は2005年2月現在のもの(税込)です。



M・M・サルト

『読書へのアニメーション
75の作戦』

(柏書房 2,940円 2001年)



三浦和尙

『「読む」ことの再構築』

(三省堂 1,575円 2002年)

本好きの子どもを 育てる秘策

(C)

ここが魅力

15ページからなる序説で基本的な考えが明示されます。あと302ページはすべて作戦。

内容紹介

読むことに関する学習指導の改善に、貴重な示唆を与えてくれる本です。本質的に人間に備わっている読む力を発達させ、読書への関心を向けさせるための理論と方法がここにあります。

本書の中心となる75の作戦は、次のように構成されています。

〈タイトル〉それぞれの作戦には「ブルル」「海賊文」といったタイトルがつけられています。その解説がここに述べられます。

〈参加者〉活動の対象です。人数までが示されており具体的なイメージを喚起させてくれます。

〈ねらい〉3・4項目の箇条書きで、活動のねらいが端的に示されています。

〈責任者〉活動と本との架け橋となるアニマドール(仲介者)・活動の責任者にとって必要な条件が述べられます。

〈必要な素材と手段〉活動を成り立たせる学習材が細かく述べられます。

〈実践方法〉方法が平易に、実践に移しやすいように配慮されて説明されます。

〈所要時間〉どのような授業として実践するかを考える際に役立ちます。

〈興味・関心と難しさ〉アニメーションの分析です。

読むことの指導に関する 理論と実践方略

(A)(C)

ここが魅力

理論と実践方略、読むことに関する指導改善に取り組みようとする際の、テキストと同時にハンドブックの役割を果たしてくれます。

内容紹介

「はじめに」では「(読むことの学びは)国語科学学習においてそれを抜きにはできない『重要な』話題であるはずである。今改めて「読む」ことについてとらえ直してみたい」と述べられています。

本書を貫くのは、ここに示されているように「読むことの学習指導の課題をどうとらえ、それをどう改善するか」という切実な問いかけです。この課題意識のもと、文学の授業、古典の指導、説明文の学習指導が取り上げられ、読むことの効果的な評価のあり方、国語学力のとらえ方が示されます。

「子どもたち相互がかかわり合い、触発しあうことで、生きた言語体験を経、ことばが生きて働くものとなる」「単元的展開は、子どもたちのかかわり合い・相互触発を必然化する点で、個別化・個性化の方向に向かう」といった、はっとするような指摘、提言が随所にあり、それが新しい指導構想の手がかりになるものと思われます。

日々の指導改善に悩む先生方の立場に立って記述され、現実感を伴った訴えかける内容になっていることも、本書の魅力です。

平成18年度版
現代の国語
現代の書写
教科書待望号
I

今、問われる
「読むこと」の学習指導

「読みの交流」に 1 みられる話し合いの パターン

文学的文章の学習材を用いた授業で行われている「読みの交流」をみてみると、「読みの交流」の目的の違いから次ページの表のように三つの型に分類することができる。

「羅列的な読みの交流」は、特に小学校段階でよくみられるものである。指導者は読みが広がりそうな箇所を発問として提示し、学習者は、自分の読みをめいめに発言する。多くの場合、それは、指導者の手によって分類されたり評価されたりしながら、板書されていく。このとき学習者は、それぞれの読みを伝え合っているのであり、なにか一つを選ぶとか、一つにまとめていくことを目指していない。そのため、自分の読みとほかの学習者の読みとを相対化したり関係づけたりする学習は、指導者が求めない限りみられにくい。しかし、一つの部分に対してさまざまな読みが存在し、読みが広がっていくという現象に向き合うという価値ある経験をしていることになる。

次に、「論争的な読みの交流」は中学

校から高等学校段階にかけてよくみられる。いわゆる

「読みの割れる」箇所に関して、それぞれの立場を主張し論争する「読みの交流」である。この

とき学習者は、自らの読み（立場）を主張するために、学

習材に立ち戻り、根拠を見つけ出す学習を進めている。この学習によって個人の読みに深まりが生まれる。そのため、この型の「読みの交流」はよく行われている。

しかしこの型は、以下の点で中学生には取り組みにくいと考えられる。

- ①「読みが割れる」箇所が学習材の中に見出しにくい。
- ②論争を進めていく力が学習者に身についていない。
- ③論争の決着点が学習過程の最終地点になりにくい。
- ④二項対立となるため多くの学習者の参加が難しい。

2 多様ななかかわりを 基盤にした 読みの交流

教室で
読む①



文学的文章の学習材への 多様ななかかわり

豊かな読みを生み出すために

松友一雄

福井大学

そこで、改めて、文学的文章の学習材を用いて「読みの交流」を行う目的を考えてみるとするならば、他者と読みを交流する学習が積み重なり、最終的には自らの中に生み出される多様な読みを選び取ったり、紡ぎ合わせることができるようになることである。



【まつとも かずお】国語学力の形成過程や定着のあり様を明らかにすることで、より効果的な国語学習を模索している。また教員研修のe-ラーニング化、対話型授業支援システムの開発を進めている。(URL : <http://www.lesis-k.com>)

読みの交流の類型

	羅列型の読みの交流	総合型の読みの交流	論争型の読みの交流
対象となるポイント	イメージや読みが広がりを見せる部分	教材全体	読みが割れる部分
学習者のかかわり	お互いの読みを伝え合う。	お互いの読みを総合する。	自分の読み（立場）を主張し、異なる読み（立場）と論争する。
教師のかかわり	学習者の読みを比べたりまとめたりして、類型化する。もしくは評価する。	教材へのさまざまなかかわり方を学習として提示する。	教材の記述に基づく根拠などの提示を求め、より深い論争へと導く。
読みの交流の目的	一つのポイントに対してさまざまな読みが生まれてくることを体験する。	かかわり方の違いから生まれてくる多様な読みを関係付け、作品の総合的な理解を目指す。	教材に立ち戻りながら、自分の読みの根拠を提示することにより読みが深まる。・対立するポイントをめぐる読みを理解することで、読みが広がる。

そこで、「読みを紡ぎ合わせていく学習」としての「総合型の読みの交流」が必要となってくる。この型は、クラスで分担してさまざまな観点から得た読みを紡ぎ合わせ、一つの読みをつくり上げていくための「読みの交流」で、近年の「も

のづくり」型の言語活動などでよくみられるようになった。「協働して読む」活動と考えることもできる。もともと違う観点から読みをつくっているのです、どちらが正しいかという問題にはならず、どうやって紡ぎ合わせていくのかというこ

とが目指されるため、分担の方法に工夫を施せば多くの学習者に責任ある参加が求められる利点がある。

また、対象となる箇所が、作品全体に及ぶことが多く、適度に抽象的な思考に慣れてきた中学生に作品全体に向き合わせていく学習としても効果が高いと考えられる。

「総合型の読みの交流」は、分担する観点をどのように設定していくかが授業を構想する際のポイントとなる。そこで、『現代の国語』では、学習材に対してさまざまなかかわりを学習者が結べるような工夫を施している。

・「話を聴く学習」

文字ではなく音からの導入

・選択式の学習課題

学習材に対する多様なアプローチ

・多様な表現活動

文字から他のメディアへの変換

・資料編の学習材

「読み重ね」・「読み比べ」

・資料編の読書活動

読書のアニメーションなど

以下に、具体的な学習材を用いて、学習例をあげていくことにする。

3 音から出会う詩と 文字から出会う詩

—川崎洋「ウン」（1年）の場合

韻文学習材の場合、学習材が短いこともあり、多様な出会うせ方が可能である。

この学習材の場合、音読した際に感じるリズムカルな感じが、表現の工夫としてみられるが、特別リズムカルなものではなくとも「文字表現としての出会い」と「音声表現としての出会い」に分かれて出会うことができる。

教科書を閉じて、音だけでこの詩に出会った場合、この詩すべてを再生することは難しいだろう。ただなにかしら、交互に「ウン」と「ホント」が入り交じって聞こえてくる。私などは、実際に声だけでこの詩に出会い直して初めて、

冗談のようなホントがあり
涙ながらのウンがあつて
なにがホントで
どれがウンやら

という四連目の意味が実感できたところがある。一回ではすべて聞き取れないので、二回、三回と聞いているうちに、「ウ

ン」という鳥がいます」も「ウン」のほうが高く感じてしまい、「嘘」という鳥がいるのかと感じてしまったり、ごちゃごちゃな感じを解消するために、本当に「水をすくう形に両手のひらを重ね」、「そつと息を吹きかけ」てみたくなったりした。

一方で、文字から出会った場合、どうだろう？ 「ウン」「ホント」に目がいくのは確かだが、それよりも「まっかなウン」とか「涙ながらのウン」にドキツとし、「ホント」という鳥はいませんが」で少し笑みを浮かべたりする。

文字を見て、頭を働かせることと、音を聞いて頭を働かせるのでは全く異なる部分が焦点化されたり、感じたり考えたりすることも異なってくる。

これはどちらが正しいという問題ではないのだが、「ウン」という詩を読んではいくためには、両方を総合していかなければならぬ。「音から出会ったグループ」と「文字から出会ったグループ」との交流を「読みの交流」として考えてみてはどうだろうか。

学習材へのかかわり方が違うのだから、それぞれが感じたり、考えたりしたことを伝え合わなくてはならない。異なるかかわり方をしたグループに対する報告責任が生まれてくる。この段階で正誤

「ウン」（1年）「音から」も「文字から」も出会うことができる。それぞれの出会い方による感じたこと、考えたことの違いを交流することで、「協働の読み」が生まれる。

ウン

ウンという鳥がいます
ウンではありません
ホントです
ホントという鳥はいませんが
エンマさまさまを挟まれる
なんてウン
まっかなウン
ウンをつかいない人はいない
というのホントであり

ホントだ
このようにホントがあり
涙ながらのウンがあつて
なにがホントで
どれがウンやら
そつと私はいつも
水をすくう形に両手のひらを重ね
そつと息を吹きかけるのです
このあたなかだけは
ウンではないと
自分ですらすらと

川崎洋



1 両方の読みを比べて、感じたこと、考えたことの違いを交流しよう。

2 「音から」の読みと「文字から」の読みを比べて、感じたこと、考えたことの違いを交流しよう。

や質の基準で論争するような話し合いの方向性は消えてしまふ。

また紡ぎ合わせるための観点も、かかわり方の異なりとして当初から明確になっているので学習者自身が「読みの交流」を進めやすくなる。

そして、紡ぎ合わされた読みを「正しい読み」としてではなく、「協働の読み」として共有していく授業が成立すると考

コンパクトな読みで 4 交流を活性化させる ― 菊池寛「形」(3年)の場合

非常に深いテーマ性をもつ文学学習材を扱う場合、多様ななかかわりをもたせることよりも、じっくりと文字で描かれた世界に浸らせたいと考えることがある。菊池寛のこの短編作品も、「形」というものが人間に及ぼす意味について深く考



「形」(3年)「あなたにとって『形』とは何か。」こんな問いには、答えを一語で表現すると、多くの人の読みを活発に交流することができる。

文学的文章の学習材への多様ななかかわり

えさせられるものであり、じっくりと考えさせたいという思いが授業を構想する際に強くなる学習材だと思う。「学びの道しるべ」(学習の手引き)にあげているようなことを通じて、人物関係を読みとり、表現に迫り、しっかり読み取らせたい。表現に迫り、しっかり読み取らせたい。考えさせたいと願って授業を構想したい。では、我々にとって「形」とはなんなのだろう。それは、「新兵衛にとつての形」「若い土にとつての形」「雑兵たちにとつての形」を踏まえたい。この「形」ということにはなるのだが、そういった作品世界に提示されている考え方にふれて、学習者自身がどう考えるか、ということなのだろう。

この点を交流させようとする、文章を書かせたくなる。指導者は書かせれば書かせると考えることが多いが、実際はどくなる。書くことが苦手な学習者は無理やりひねり出すから、考えていないことまで書いてしまうし、たくさん書けば書くほど内容が増えていき、ほかの学習者と重なる部分が多くなり、読みの交流が難しくなる。

「自らの読みをことばにする」ことは「読みの交流」を図るためには必要なことだ

が、方法としては二つの方向性がある。一つは従来のように、文章表現として詳しく説明することである。この方法は自分の読みをだれかに伝達する場合には適切といえるが、たくさんの人と交流する場合やそれぞれの読みを総合して、学級の読みをつくり出すときには適さない。

これに対して、凝縮して表現する方法がある。これは自分の読みを詳しく説明するには適切とはいえないが、多くの人の読みと自分の読みを比べてみたり、「読みの交流」を進めるには適切な方法といえる。「あなたにとつて『形』とはなにか、一語で表現しましょう。」という問いにどう答えるだろう。学習者は、うんと頭をひねりながら、自分なりの一語にたどり着くことだろう。

ちなみに私は「影」という語を選んだが、あなたは何を選ぶだろう。

いずれにせよ、「読みの交流」を活性化しようとするならば、表現しやすいサイズの表現で多くの学習者の参加を促し、交流しやすいサイズの表現で、交流を活性化しなければならない。

表現サイズが小さければ小さいほど、理解し合うために足りない部分を話し合う必要に迫られる。そこにこそ、「読みの交流」が生まれてくることになるのだ。



リテラシー

literacy [英] ことばの力

リテラシーは、今まで一般に「読み書きの能力」「識字」であるとされてきた。しかし現在では、「ある分野に関する知識や能力」のことをリテラシーというようになっている。PISA2003年調査では、言語のリテラシーである読解力について、「読解力とは、『自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力』である。」としている。今後は、単に言語操作のみにかかわらず、さまざまなメディアや知識を目的に応じて有効に用いていくことを広義の「リテラシー」とすることになるだろう。

国語（ことば）の教育は、媒体（メディア）である言語記号（シンボル）の理解と操作の力を育てることを目標としている。このことから、国語の教育は、ことばに結びついた概念の理解と操作の中核を担うものであるといえる。したがって、言語のリテラシーは、数学や科学などのリテラシーの習得に際しても、基本的な枠組みを提供するものであり、最も重要なリテラシーであると考えられる。他の領域のリテラシーをも射程にいれながら、新たな言語リテラシーの教育を構築すべきときがきている。

もっと知りたいときは…

国立教育政策研究所 / 監訳
『PISA2003年調査
評価の枠組み』
2004年 ぎょうせい

カタカナ語

1

パフォーマンスとは、一言で表すならば、「行うこと、表現すること、成果を生み出す力」ということになるだろう。これを学校教育にあてはめれば、ある一定のテーマや課題に対する表現や解決の力であるといえる。欧米などでは、新たな領域に対する評価に関して、多様な研究が進められている。ペーパーテストによって測れる、一定範囲の定められた内容に対する定量的な学力や能力のみならず、例えば、ポートフォリオによる評価など、よりオーセンティック（実際の）な場面で発揮される総合的な能力についての研究が、注目されつつある。その一つにパフォーマンス評価がある。

もっと知りたいときは…

『指導と評価』
2004年5月号
『ポートフォリオ評価
パフォーマンス評価』
図書文化社

パフォーマンス評価では、学習者が自ら設定した目標に対して、どのように計画を立て、どのような方法によって学習を行い、当初の目標を達成できたかを総合的に判断する。その際に重要なことは、行った学習内容や方法、計画などが妥当かつ適切なものであったかどうかなどを検討し、学習に対する戦略（ストラテジー）を見直すプロセスを設定することなのである。また、その成果を収めるまでに、どのような不安があったのかなど、学習自体へのリスクも含めて、総合的に学習の成果と過程を評価することも必要である。

パフォーマンス

performance [英] 実績・評価

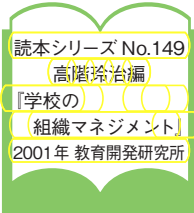
マネジメント

management [英] 経営管理

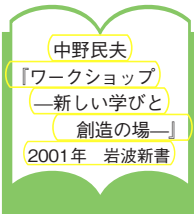
マネジメントは、一般に企業の経営管理のことであると考えられてきた。しかし、これからは、地域・社会からの自律的な学校経営に対する要請などにより、学校も組織体としての色彩が強まり、独自のマネジメントを構築することが必要である。

それぞれの学校が独自性を高め、児童・生徒のよりよい成長を目的に、学校経営の方針やその具体化である学校経営計画を立て、教育目標を効果的に具現化することが今、求められている。学校経営方針・経営計画に基づき、教育目標を実現する手段として、学校経営をマネジメントの視点からとらえ、P (plan: 計画) D (do: 実行) C (check: 評価) A (action: 更新された行為) のサイクルによって組織的に、学校を創り、動かし、変えていく営みが必要である。学校においては、特に、教育の内容・方法である教育課程 (カリキュラム) について、「カリキュラムマネジメント」の視点で、PDCA のサイクルに基づき、子どもや保護者に対して、責任ある対応 (アカウントビリティ) が求められる。また、教育の成果 (例えば学力向上等) の実現により、生徒や保護者の満足度や信頼度を向上させていかなければならない。

もっと知りたいときは…



もっと知りたいときは…



ワークショップは一般的には、①仕事場。作業場。②研究集会。講習会。③舞台芸術などで、組織の枠を超えた参加者の共同による実験的な舞台づくり。のように解説されている。こうした意味を学習の観点から統一的にとらえ直すと、「参加体験型のグループ学習」という意味につながるであろう。ワークショップは、知識のみに偏重した教育の反省から生まれてきた学習方法である。ここでは、ことばなどの記号だけで理解するのではなく、身体を使って行うこと・感じることといった「心身」全体をとおして体験することが重視される。もちろん体験さえすればよいというわけではない。その体験から学ぶ、体験に学ぶという視点が不可欠になる。

教える側から学ぶ側への一方的な知識伝達型の学びではなく、ワークショップでは学習者自らが積極的・主体的に参加していく双方向的な学びを必要とする。学習者はそれぞれが対等の立場で参加していくことを前提とする。各々が自身の能力を發揮し合うことで、はじめて協働 (コラボレーション) の場となる。協働でやり遂げた、何かを創り出したという成就感がもてることに、この活動の大きな教育的意味がある。

ワークショップ

workshop [英] 協働 (制作)

情報ライブラリー

ちょっと
気になる

前から気になっていた、最近よく目にする、そんな「知りたい」カタカナ語をわかりやすく解説。もっと詳しく知るための文献もご紹介します。

平成18年度版

『現代の国語』
『現代の書写』

SNP

サポート・ネットワーク・プログラム

構成マップ

現代の国語

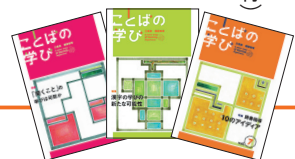
学習指導書

- 1 学習指導のために1・2・3 (各8分冊セット)
- ① ② 学習指導と解説本編 (上・下)
- ③ 学習指導と解説資料編
- ④ 学習指導と解説言語事項ノート
- ⑤ 学習指導事例集
- ⑥ テスト問題例集・発問例集
- ⑦ コピー用学習材集
- ⑧ デジタル情報CD-ROM
- 2 「話す・聞く」学習指導AV資料
- 3 学習指導書 総説編 カリキュラム開発のために
- 4 「読むこと」学習材の研究1・2・3
- 5 学習指導資料 (4分冊セット)
- ① 詩編 ② 短歌・俳句編 ③ 古典編 ④ 和歌編
- 6 朗読CD 1・2・3
- 7 読書の森へCD-ROM



サポート資料

- ・『ことばの学び』(年4回発行)
- ・国語教育ブックレット
- ・カリキュラム開発資料
- ・年間学習指導計画作成資料
- ・学習評価改善実践資料
- ・学習材別評価実践資料
- ・「聞くこと」指導CD
- ・教科書Q&A
- ・移行措置資料
- ・学習材ワークシート



生徒用教材

- 1 ワークブック1・2・3
- 2 漢字・語句学習ノート1・2・3
- 3 文法学習ノート
- 4 実力アップ問題集1・2・3
- 5 教科書ガイド1・2・3
- 6 ステップ式常用漢字ドリル

後援事業

NPO法人
I・L・E・C言語教育文化研究所主催
「中学校国語教育セミナー」
「小学校国語教育セミナー」
*毎年夏に東京・名古屋・大阪・福岡で開催
「専門研修講座」 ほか



指導用教材

- 1 ピクチャーカード(A2判・100枚)
- 2 サポートビデオ(6巻まで刊行中)
- 3 サポートDVD



現代の書写

学習指導書(各3分冊セット)

- ① 学習指導と解説
- ② 指導ワークシート集(はぎ取り式)
- ③ 指導用CD-ROM
(執筆実技映像・指導案のテキストほか)

サポート書籍(二部をご紹介します)

『ことばの学びと評価 ―国語科授業への視角―』
 『中学校 国語科の評価 ―単元の学習指導と評価計画―』
 『ことばが育つ学びのプラン ―21世紀の国語科授業づくり―』
 『気軽に楽しく短い時間で力のつく 50のアイデア』シリーズ
 『声を読もう声で描こう ―朗読のための17の葉―』
 各種辞典・ハンドブックシリーズ

『現代の国語』『現代の書写』ホームページ
<http://tb.sanseido.co.jp/kokugo>

The screenshot shows the website interface for 'ことばと学びの宇宙'. At the top, there is a search bar and navigation icons. Below that, there are links to '国語の世界' (World of Language), 'ことばの世界' (World of Language), 'ひるがる学びの世界' (World of Learning), '教科書新時代' (New Era of Textbooks), and '英語の世界' (World of English). The main content area is divided into '国語の世界' and 'ことばのコーナー'. Under '国語の世界', there are links for '小学校 国語情報', '中学校 国語情報', and '高等学校 国語情報'. The 'ことばのコーナー' section features '国語の世界 ことばのコラム' (World of Language Language Column) with a sub-section '教室とことばと一小・中・高のつながり' (Classroom and Language and the Connection of Elementary, Middle, and High Schools). It highlights a '第2回 コラボレーション活動' (2nd Collaboration Activity) with articles by 田村 裕子 (Yuko Tamura) and 水野 美鈴 (Misuzu Mizuno). The footer includes 'ことばの季節' (Season of Language) for January with a 'ラグビー' (Rugby) theme, 'ことばの学び' (Learning Language) vol. 7, and '2005年(平成17年)三省堂 国語教科書SNP 10の約束' (2005 (Heisei 17) Sanseido Language Textbook SNP 10 Promises).



一周遅れの トップランナー

教育ジャーナリスト
矢内 忠

[やない ただし] 1960年生
まれ。國學院大學哲学科卒
業。元日本教育新聞社記者。

作法、しつけ、と聞くと堅苦しく響くが、なかなか合理的にできている場合もある。鹿児島市立田上たがみ小学校が作成した「学習のしつけ」という教師用資料は、小学館から『教育技術ムック』として出版化された知る人ぞ知る指導書だが、三年前に同小の研究主任からオリジナルを見せられたときは鮮明に覚えている。

一九八三年に初版が作成され、ちょうど改訂版だった。「平成版」と銘打たれた際、「実は本校ではこんなものもつくっておりまして…」とおぼろげと差し出されたものがそれで、初版作成当初こそ県内で評判をとったが、それも九〇年代の「新学力観」以降、忘れられた存在に近かった。それが、まる

で流行が一巡りしたかのように、その指導資料に新鮮さが感じられたのである。

書かれていることは、一見、他愛ない内容なのだ。例えば国語のページ、『読むこと』におけるしつけで〈音読をするとき〉の指導ポイントとして、『聞き手のほうを向いて読む』『聞き手の準備が整ったかを確かめてから読み始める』などと述べている。その際の子どもの机上の様子まで図示した。教科書は左、ノートは右、左前方には手前から定規、鉛筆、赤ペン、消しゴムと置く位置まで決まっている。

（一人で読み取るとき）（黙読するとき）の場合はこうである。「学習のめあてを解決する手がかりになると思われる個所には、次のように区別して線を引く」とあり、「人物の行動」については実線、「人物の気持ち」については破線、「場面の様子」については波線を引く…といった具合。九〇年代までなら時代錯誤的にかんじられることもあった（今でもあるかもしれない）だろうが、出版化を図った編集者に言わせると、A D H Dなどの問題に直面する今日、こうしたものが「福音のよう」に聞こえるのだという。

編集後記



●学校教育をめぐり、「学力向上」や「次期学習指導要領」といったことは、マスキミをにぎわすようになってきました。中学校では平成18年度より、新しい教科書の使用が始まります。三省堂では、現在発行している「現代の国語」を改訂するとともに、新刊として「現代の書写」を発行いたします。

「ことばの学び」では、本号より11号までを「教科書特集号」として18年度版「現代の国語」「現代の書写」をめぐり、次のようなテーマでの特集を予定しています。

- 8号 今、問われる「読むこと」の学習指導
- 9号 「基礎・基本」と「補充・発展」(仮)
- 10号 国語科書写 (仮)
- 11号 カリキュラム開発と評価 (仮)

(太郎)

三省堂
国語教育
はなむねの学び 第8号

二〇〇五年四月一日発行

定価 一〇〇円 (本体九六円)

編集・発行人 八幡 統厚

発行所 株式会社 三省堂

〒一〇一八三七

東京都千代田区三崎町二二二一四

TEL 〇三(三三三三)九四一七(編集)

振替 東京 〇〇一六〇一五五四三〇〇

印刷所 泰成印刷株式会社

東京都墨田区両国三一一二

読み語りの
出前①



「あたたかい時間を 思い出した」中学生



後路好章

〔うしろ よしあき〕アリス館編集長。児童書の編集歴四十一年。「読み語り症候群」という病にかかっている。時には、ウクレレ片手に絵本の「歌い語り」もする。



「ちりとちりり」(どい かや・作 アリス館・発行) 172ミリ×240ミリ
32ページ 1260円(税込み) 続編に「ちりとちりり うみのおはなし」

「さあ、どの絵本を読んでほしい？」
絵本づくりの舞台裏の話をしたあと、黒板の前に絵本を十冊ほどずらりと並べ、生徒に選んでもらう。一番人氣が「ちりとちりり」だった。「ちりとちりり」が、とてもはやおきをした。あるひ、ふたりは、じてんしゃで、でかけることにしました。ちりちりり、ちりちりり、もりのなかを、はしっていると、どこからか、いいかおりが、してきました」
ゆつくりゆつくり読む。読むほかに、

「うちの中学一年生に絵本の読み聞かせをしてくれませんか」
千葉県東金市の先生から依頼があった。アリス館のホームページで、私が和歌山県の中学校で読み語り(私には「読み聞かせ」より「読み語り」の言い方がびつたりくる)をした記事をご覧になってのことらしい。
このような依頼は、最近めずらしいことではなくなつた。

生徒の体がだんだん前にせり出してくる。絵を読もうとしているのだ。生徒との一体感が徐々に深まっていく。読み語りは、字を読む側と絵を読む側、両者がつむぎ出す共同作業なのである。
ちりとちりりは、いろいろあるものの中から、自分たちに一番びつたりしたものを選びながら進んでいく。今の日本は、自由に選ぶことができる幸せな環境にあることを感じとってほしい、と願いをこめて読む。
一週間ほどたったある日。中学校から生徒の感想がどさつと届いた。「小さい時、お母さんに読んでもらった、あたたかい時間を思い出しました」「読んでもらって、うれしかったです。とても幸せな気分になりました」
これを書いてくれたのは、あの子かな？ 子どもたちの顔が浮かんできて胸があつくなる。これだから、読み語りの出前はやめられない。
長野県諏訪市の中学校で、この絵本を読んだときのこと。校長先生が駅まで車で送ってくださった。ハンドルをにぎりながら、校長先生は駅に着くまで、口ずさんでいた。
「ちりちりり、ちりちりり、、、、」

SNPウェブサイト「ことばと学びの宇宙」

教科書新時代

Web ガイダンス

— Next Stage! いよいよ開幕。—



1998

教科書

2002

新ルネサンス宣言

2006

新連載

Triangle Column

トライアングルコラム

国語教育人物誌

中瀬 正堯

2010

ことば・こころ・いのちを考える
—家庭と学校のコラボレーションを求めて—

尾木 和英

ことばと教育の最前線

—雑誌情報から—

篠田 信司



『現代の国語』のコンセプト

平成14年度版『現代の国語』からつながる新しい教科書のコンセプトを紹介します。



『現代の国語』を使おう

平成14年度版『現代の国語』の「指導と評価」についての考え方、『現代の国語』『資料編』の活用のアイデアなどが掲載されています。



『現代の国語』作者・著者からの
直筆メッセージ

『現代の国語』作者・著者による子どもたちへ向けた直筆のメッセージ集です。



教科書について対話しよう

— 教科書フォーラム —

教科書を使っているすべての人、教科書に興味のあるすべての人、教科書に質問、意見のあるすべての人…すべての人にひらかれたフォーラムです。

教科書新時代 Webガイドスは

SNP ウェブサイト「ことばと学びの宇宙」からアクセス

<http://tb.sanseido.co.jp/kokugo/>

テキストから
プログラムへ